



毎月一回一日発行
昭和40年2月20日
第三種郵便物認可

2-1999

威信確保と維持を図る米国 危機作り出すイラク・北朝鮮

山崎 真二

(時事通信社外信部長)



イラクは一九九〇年八月、クウェートを侵攻した直後に、国連の安保理決議によって石油の全面禁輸を含む経済制裁を受けた。その後、安保理は国連決議によって大量破壊兵器の廃棄、査察の受け入れを義務付けた。従って経済制裁を解除してもらったためには大量破壊兵器を廃棄して、本当に無いということが確認されなければいけない。イラクに対する大量破壊兵器の廃棄、査察について誤解されている部分があるが、核兵器、生物・化学兵器、射程百五十キロ以上の弾道ミサイルの四分野がある。核兵器はイラクが廃棄したことはほぼ間違いない。ミサイルも大体終わっただろう。残りの生物兵器と化学兵器が今、問題になっている。

イラク情勢を振り返ってみると今回を含めて四回の危機があった。最初は一昨年の十一月、イラクは査察を拒否したが、このときはロシアが調停に回って何とか危機を回避した。昨年二月、国連のアナン事務総長がバグダッドに乗り込んで危機を回避した。八月から十一月の初め、またイラクが査察を拒否して、アメリカは湾岸に部隊を派遣し、あわやということになった。それから今回、生物・化学兵器が相当残存

の中に、イラクは化学兵器について弾頭十二万五千発、化学剤六百トン、化学剤になり得る物質三千トンを保有しているとある。その後のUNSCOMの査察活動、廃棄活動によってだいぶなくなったといわれている。しかし、ニューヨークで国連の関係者に本当のところはどうなんだと聞いたら、「まだ相当程度残っている」とのことだ。しかも最近になって、オウム事件に使われた猛毒のサリンとかダブン、もっと毒性の強いVXガスを大量に製造していた疑いが濃厚だという。

生物兵器は一九九五年にやはりUNSCOMが安保理に出した報告書があって、炭素菌を装った弾頭百九十一発が完成したといわれている。イラク側は廃棄したと言っているが、UNSCOMの話では、すべての生物兵器が廃棄されたかどうか確認できない。

今回、アメリカとイギリスがイラク攻撃に踏み切ったタイミングは非常に微妙だった。アメリカが武力攻撃に踏み切る前日はクリントン大統領の例の「不倫もみ消し疑惑」を巡って、アメリカ下院本会議で弾劾審議を始めようとしていた。当然、イラクに対する武力攻撃は弾劾審議を国民の目からそらす狙いがあったと考えられるが、個人としては、大統領弾劾の流れは避けようがないから決定的な要因ではなかったように思う。

これまでのイラク、アメリカの関係の流れを見ると、ここでアメリカがイラクをたたきやすい環境が出来つつあったと思う。一つは国連の調

停。昨年二月にはアナン事務総長がバグダッドへ行って調停に成功したが、今回は国連も調停できないことをアメリカが知っていた。

第二にアラブ諸国の中のイラクに対する支持、同情が若干弱まってきた。アラブ世界の中でも、フセイン大統領の査察拒否に対しては、もういい加減にしてくれ、うんざりだという空気が強まってきた。アラブ諸国のイラクへの支持の弱まりをアメリカは見抜いていた。

第三点としては、これまで国連安保理の中でイラク寄りの立場をとってきたフランス、ロシア、中国の微妙な変化が挙げられる。この三方国はイラクの石油資源に非常に関心を持っていて、特にロシア、フランスは実際に開発プロジェクトを進めようとしていた。一連のイラク危機の中で、この三方国は安保理の中で常にイラクに対する制裁解除をもっと早くしろと主張してきた。

ところが昨年八月にイラクが査察拒否したあと、安保理で相次いでイラク非難決議とイラク制裁見直し凍結決議が採択されて、これにはこの三方国も同調している。もちろん公式には依然としてアメリカの武力行使には強く反対している。しかしながら前ほどではない。中国も武力行使反対と言っただけでもない。安保理の中で今回の武力行使に非常に強く反対しているのはロシアのみ。とはいってもアメリカに対して国際的な面での制裁を加えるといった行動はしていない。

アメリカの今回の狙いは何か。一つはアメリカ

の威信を確保、維持しようとした。アメリカは中東和平のプロセスとか北朝鮮も視野に入れて、ここはやらなければいけないと判断した。第二にフセイン大統領に対して、おまえの政権を倒すというメッセージを伝えた。直接的にはフセイン政権の基盤である共和国防衛隊とか、軍事施設をたたく。化学・生物兵器を破壊する狙いがある。アメリカは艦船からの巡航ミサイルの発射、航空機による爆撃をやっているが、地上部隊は出さないと、出せない。となるとフセイン政権を倒すことはできない。武力攻撃によって国連による査察は当面無理になる。

米はフセイン打倒も視野に

クリントン大統領は武力攻撃開始に当たって、「パワフルかつ持続的な空爆を行う」と言っている。今回のアメリカ・イギリスによる武力攻撃は相当な期間続く可能性がある。とはいっても、アラブ諸国は昨年十二月二十日前後から約一カ月間、断食月のラマダンに入り、明けるのが一月十五日ころ。その間は攻撃を控えるだろうというのが一般的な見方である。

アメリカは巡航ミサイルや空爆だけでフセイン政権を倒せるとは思っていない。恐らく空爆によってイラクを抑えつつ、その一方で中期的な展望として、フセイン政権を打倒するという構想を描き始めたと思う。

昨年十月末にクリントン大統領はイラクの反体制派を支援する「イラク解放法」に署名した。イラクの反体制派の活動に資金を与えるものだ。イギリスもロンドンに本部を置くイラクの反体制派十六の組織を集めてフセイン後の政権構想について協議を始め、これにはアメリカ国務省の高官も出席している。しかし、イラクの反体制派といつてもいろんな派があつて七十ぐらいに分かれているらしい。力もないし、それぞれ利害が絡まっているから、一本にまとめてフセイン体制を打倒するような勢力にすることは簡単にはいかない。

フセイン政権はどうするのか。湾岸戦争によってアメリカに徹底的にたたかれた。核兵器はほとんどないし、ミサイルもほとんど残っていないといわれている。そうなるとアメリカの空爆に反撃することは難しい、防御するしかない。フセイン大統領は「国民がたとえ十万人、二十万人死んでもわれわれは持ちこたえる」と言っている。そうだが、フセイン大統領は国民に徹底抗戦を呼び掛けて防御体制を固めて反米感情を増幅させ、その一方、アラブ諸国の中に反米感情が広まって、国際社会からイラク支持の空気が出てくるのを待っている。あるイラクの高官は、宮殿なり大統領施設がアメリカによって破壊されたら、われわれはやるべきことをやると言っている。湾岸戦争のときのように、場合によってはイラクがクウェートに軍隊を出したり、イスラエルにミサイルを撃ち込むことはあり得るかもしれない。そうなると一時

的に軍事的な緊張がさらに高まる。

朝鮮半島情勢も転機に

朝鮮半島情勢も重要な転換点に差しかかっている。これまでにはつきりした点は三つある。一つは朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が今のところ韓国の金大中大統領の太陽政策に応じるつもりはないということ。むしろ逆に太陽政策を利用して自分たちに有利なように持つていこうとしているように思われる。第二がミサイル発射、核開発の凍結破棄・再開の脅しに見られるように、危機を作り出して、あるいは緊張を作り出して、それをアメリカに高く売りつけて何かを得ようとするいわば瀬戸際外交。第三に北朝鮮は韓国は相手にしない。相手にするのはあくまでもアメリカであり、アメリカとは交渉していくということだ。

北朝鮮の地下施設問題が深刻だと思う。昨年八月にアメリカのワシントン・ポスト、ニューヨーク・タイムズ、CNNが相次いで報じたが、北朝鮮の寧辺の北東四十キロの山岳地帯に一万五千人あるいは二万人といわれる労働者を駆り出してトンネルを掘っている。アメリカの軍事衛星の写真から判明したのだが、核燃料の再処理施設という疑いが濃厚だ。アメリカの情報では数年以内に完成するらしい。しかもこの地下の施設で核兵器開発のために必要とされる起爆実験が一昨年から三回行われたといわれている。もしも北朝鮮が核を

持つてこれをテポドンに積み込んだりするとエライことになる。北朝鮮は民生用だと言っているが、北朝鮮の高官が軍の大事な施設だと認めたという報道もある。

コーエン国防長官は、地下の施設が米朝合意の違反か調べて、必要なら北との関係を再検討するし、地下査察が必要だと言っている。この地下核疑惑施設についてはアメリカ議会が強く反発、地下施設の査察をしない限り総額三千五百万ドルの重油供給資金を出さないと言いだした。こうなると米朝の核合意の順守が難しくなってくる。

そこで今、アメリカは北朝鮮に対する見直しを始めた。これまでは主に国務省のキャリア組が北朝鮮政策を作成して北との交渉に当たってきたが、今度はペリー前国防長官が中心になって北朝鮮問題の調整に当たることになった。クリントン大統領の考えとしては、これまで国務省に任せていたものをホワイトハウス主導でやっつけていこう、それだけ北朝鮮問題に真剣に取り組むということだろう。今年二月か三月には北朝鮮に対する見直し協議は終わるだろう。そのときもしアメリカが政策の転換をすると、北の反発で朝鮮半島で一気に関係が高まるだろう。

一方、米朝合意の維持が決まったら一安心かというところ、とんでもない。アメリカ議会が北朝鮮向けの重油供給の資金の支出に対して、非常に厳しい条件を付けている。つまり総額三千五百万ドルの重油供給資金の支出のうち、最初の千五百万ドル

は三月から五月にかけて出されることになっているが、そのためにはまず北による米朝合意の全面履行と南北（韓国と北朝鮮）の対話の推進が必要という。さらに残りの二千万ドルは六月から九月にかけて出すが、一九九二年の南北非核化共同宣言の実施に向けて米朝協議の開始と、北の地下施設への査察、北の弾道ミサイルの脅威軽減のための米朝交渉の進展が条件だ。これを満たすには北朝鮮を何とか説得して大幅に譲歩させなければいけない。しかしながら、北朝鮮から見れば地下施設への査察とか、弾道ミサイルの脅威削減のための交渉にすんなり応じるわけにはいかない。北が軟化しない限り米朝の合意の維持は難しくなる。

一九九四年の米朝合意でもかくも朝鮮半島の緊張は避けてこられたが、これが崩壊して再び脅威が発生する恐れが十分ある。当面の焦点は一月十九日からジュネーブで開かれる四者協議の第四回本会談。その前後にアメリカと北朝鮮の高官協議が再開される。これで北側はどんな態度を示すか、特に金正日総書記が名実共に北の全権を掌握してから初めてのアメリカとの対決、アメリカとの交渉の場となるわけだから、これにどう出てくるか、今後の朝鮮半島情勢を見るうえで非常に大きなポイントになる。

（本稿は十二月十八日、同盟クラブの講演会から一部を要約）

「ワナ」説と日系人の苦難 米国に見る太平洋戦争

小糸 忠 吾

(同盟クラブ会員)

大統領による「ワナ」か？

太平洋戦争の勃発理由については少なくとも二つの説がある。一つはF・D・ルーズベルト大統領が言うように、一九四一年十二月七日(現地時間)日本海軍が真珠湾を奇襲したからだ。もう一つはルーズベルト大統領が上院の対日宣戦反対を未然に防ぐために、日本軍に真珠湾を奇襲させたからだ。この第二のワナ説によると、アメリカ政府は有力各新聞の海外特派員電、日本などに情報網を張りめぐらす米中央情報局(CIA)の特別情報、さらに一九四〇年末から解読していた東京

―ワシントン間の暗号電報により、日本軍の動向が手に取るように分かっていった。それなのにハワイを目標ず日本海軍を途中で迎撃しなかったのは議会対策からであった。上院は対日宣戦布告に関し、いつ終わるとも知れない反対討議を続けることは間違いない。そこで大統領はアメリカの海軍の底力を信じ、日本海軍に真珠湾の太平洋艦隊を奇襲させたのだ。

戦争史家ジョン・トランド氏はワナ説を固持する。同氏はまた聞き、焼き直しによらず、足を

棒にして証人、証拠を国の内外で探し求めた。その結果が『ライジング・サン』(旭日、一九七〇年出版、ピュリツァー賞受賞)、および『インフアミー・パールハーバー』(非道・真珠湾、一九八二年出版)であった。

『旭日』でトランド氏が言わんとしたところをせんじ詰めると、ハワイ防衛の長官、陸軍のウォルター・ショート大将および海軍のハズバンド・E・キンメル大将が日本海軍の進撃を事前に知らされ、迎撃態勢をとつたなら日本側は同計画を中止してしまつたろう。ハワイの防備は日本の攻撃に耐え得るものであるとルーズベルト大統領は信じていた——ということであった。

『非道・真珠湾』ではトランド氏は、日本海軍の攻撃を大統領は事前に知っていたが、米国の参戦に道を開くためにあえて真珠湾を「奇襲」させ、しかも開戦後に事実を覆い隠すため、ウォーターゲート事件(注、ニクソン大統領を辞職に追いこんだ)とは比べものにならない大がかりなのみ消し工作を行わせた——と明言する。

ところで緒戦におけるアメリカ軍の損害は撃沈または撃破された艦船十八隻、死者二千二百四十

八人、負傷者千九人であった。

対日宣戦布告と日系人

真珠湾「奇襲」はアメリカ国民を激怒させた。ラジオや新聞は日本に対し一斉攻撃を始めた。その矢面に立たされたのは在留邦人と日系市民(二世)であったが、彼らは不吉な予感に襲われ、なすところを知らなかった。

大統領は翌八日に議会を招集し、上下両院の合同会議を開いた。会議は一時足らずで対日宣戦布告を承認、これに反対した議員は一人だけだった。すべて大統領の思惑通りに運んだ。彼は十二月七日を「デー・オブ・インフアミー」(非道の日)と命名した。

「江戸の敵を長崎で」と言えばこじつけになる。真珠湾を「奇襲」されたアメリカ人はすぐ憤怒の矛先を在留邦人および日系二世に向けた。もともとアメリカ人には、在留邦人は日本の回し者であり、二世はその片割れである、だからいざという場合、彼らは何をしでかすか知れたものではないという妄想に駆られている人が少なくなかった。

連邦捜査局(FBI)も日本人の手代を使って早くから日本人社会、特に日本人会や県人会などの指導者の活動を調べさせていた。戦争が始まるとFBIは手分けして日本人町に行き、日本人名による銀行預金の凍結、手持ちのラジオ、カメラ、火器などの提出、八十キロ以上の無許可遠出

の禁止を伝達した。

筆者は戦争勃発四カ月前、シアトルから帰国したが、その際、未成年の二世春原忠男君に二千ドルほどを託し、彼の名義で銀行預金にしてもらうことにした。敵産凍結令により二百ドル以上国外に持ち出すことができなかったからである。ところがFBIは未成年が二千ドルもの大金を持っているはずがない、「だれの金か」と執ように問いだした。結局春原君は真実を明かしたので、FBIはこの預金を没収した。この金はついに筆者に司法省から返還されることはなかった。

一方、西部(カリフォルニア、オレゴン、ワシントン、ネバダ、ユタ、アイダホ、モンタナ)防衛司令部は邦人および日系市民のスバイ、謀略(エスピオナーシおよびサボタージュ)活動を恐れ、カリフォルニア、オレゴン、ワシントン三州の邦人および日系市民に対し、中西部や東部へ自発的に移住するよう奨励し便宜を図った。この「お触れ」に応じ約四千人が中西部あるいは東部へ移転したが、これらの人々は招かれざる客として反対、排斥された。

抑留される日系人

このような状況下で一九四二年二月十九日、ルーズベルト大統領は西部三州の日系人を内陸部へ移住させる行政命令九〇六六号を發布し、同時に西部防衛司令官にジョン・L・デービッド中将を任命した。これに伴い「ウオー・リロケーショ

ン・オーソリテーター(戦争移住庁)が新設されD・アイゼンハワー大将の兄、ミルトン・アイゼンハワー氏をその責任者に推した。

この大統領令は国家の安全を保障するために出されたと説明された。しかし抑留所は不要だった。日本人町には戦前、戦中日本軍と連絡をとり、アメリカをかく乱しようと暗躍するような一世、二世は一人もいなかった。日系人の抑留は黄禍論者、日本人悪者論者の悪夢にすぎなかった。

この抑留所の設置をめぐることは、不法行為を犯していない市民を、交戦国の移民の子女との理由だけで罪人扱いにすることで、国家の権力乱用であると考える有識者、例えば一九八八年版「エイシアン・アメリカ——一八五〇年以後の中国人・日本人」の著者、ロジャー・ダニエルなど少なくない。

棚上げされた憲法理念

なぜ邦人と日系市民は戦争中抑留されたのだろうか。しかも検挙、裁判など所定の手順を経ずしての抑留だ。答えは簡単明瞭。「国家の安全を保障するため」だったろう。だが落ち着いてからよく考えてみると、それは日本人の排斥を目指す黄禍論とアメリカの国勢拡張を目指す天定運命論(マニフェスト・デスティニー、天与の使命)の核融合による爆発ではなかっただろうか。アメリカ憲法はその爆風で棚上げされたのだらう。

やがて内陸地(カリフォルニア、アイダホ、ネ

バダ、コロラド、ユタ、ワイオミング、アーカンソー)の七州、十カ所に大きな抑留所が建てられた。いずれにも鉄条網が張り巡らされ、二十四時間ずっと監視が立哨した。さながら捕虜収容所である。邦人や日系市民は「なぜこんなところに入られたのだらう」と互いにいぶかった。

だが大統領の戦争移住令発布に反対を唱える人が連邦議会にもいた。カリフォルニア州出身のアラン・クラクソン民主党上院議員は、ルーズベルト大統領のエリノア夫人などと協力して、大統領に日系市民などの抑留を思いとどまるよう働きかけたが、大統領はこれに耳を貸さず前代未聞の挙に出たのである。

最高裁判所は大統領の行政命令を審査しこれを合憲と裁決した。この報に接した西部最大アメリカ有数の日刊紙、ロサンゼルス・タイムズは「いずれにしても、毒蛇はその卵がどこでかえろうとも、同じように毒蛇である」と常人が思い当たることわざに事寄せ、その日系人観を吐露した。デービッド西部防衛司令官も後の下院公聴会で「ジヤップはジヤップ。紙切れ一枚(市民権のこと)で変えることはできない」と言い放った。

ルーズベルト大統領は、当時ヨーロッパを席卷しつつあったナチス・ドイツ(ヒトラー総統)に呼応して太平洋を戦場化した日本に対し、理性をまひさせ、邦人、日系人を無差別に罪人扱いはしたのだった。

二世部隊の活躍

一方、アメリカ市民としての尊厳を無視され、愛国心を疑われた日系市民は身をもってあかしを立てるしかないと決起し、二世だけの部隊を編成することにした。彼らのうちには新渡戸稲造博士の英文著書『武士道』を読んだ者もいたろう。戦争移住も彼らの計画を許可した。その結果は「歩兵第四四一大隊」の実現であった。

真珠湾が攻撃されてから三日後の十二月十日、ドイツおよびイタリアがアメリカに宣戦を布告をした。その際ドイツ系、イタリア系市民はどう扱われたか。彼らは皮膚の色、容姿が違わぬいわゆる「身内」であり、しかもその人口、財力、政治力つまり社会的地位が日系市民とは比較にならないほど勝っており、大統領選挙、地方選挙に対してそれなりの影響力を持っていた。だから連邦政府はドイツ系、イタリア系市民に対し戦争移住命令など出せるわけがなかった。

そのころ、既に千五百六十五人の日系市民がヨーロッパ戦線で戦っていた。彼らの軍功は群を抜いていた。ところがある日突然、白人戦友が日系戦友をジャップ呼ばわりするようになった。次いで彼らは陸軍省の命令により武装解除された。後日分かったことだが、それは日本軍による真珠湾攻撃の余波であった。第四四一大隊の方は四千五百人の志願兵を受け入れ編成された。そのうち千五百人はハワイ出身者であった。ハワイでは志願

適齢者の八五パーセント、つまり一万人が志願し軍当局を驚かせた。

第四四一大隊はヨーロッパで歴戦、輝かしい武功をたてた。だがそれだけに一年以内に千五百人の死傷者を出し、部隊は三回入れ替わった。投降兵は一人も出ず、総参加者六千余人はアメリカ軍史上最も多く勲章を受けた。

開戦当時、徴兵局により敵性外国人(エネミー・エイリアン)または「クラス4」扱いにされたが、終戦後彼らは一九五一年の映画「やっちまえ」(ゴ・フォー・ブローク)、一九八四年の「二世兵士・旗手・国外追放民」(二世ソルジャーズ——スタンダードベアラーズ、エグザイルドヒーブル)で輝かしい論功行賞を受けた。だが彼らの背後には彼らが誇るに足る家族があったことを忘れてはならない。彼らは模範的な社会生活を送っていた。

抑留所生活の実態

シアトルで発行されている日系英・邦字新聞「北米日経」(一九九一年八月付)「北米報知」(一九九七年六月二十七日付)およびアジア系英字新聞「インタナショナル・エギザミナー」(一九九一年九月十八日付)はアイダホ州ミニドカ収容所時代につき次のように報道している。

一、一九四二年八月にワシントン州シアトル市およびオレゴン州ポートランド市の住民九千四百人(子供を含む)が収容された。

二、モリソン・クヌドセン会社が五百余棟のバラックの建設を請け負い、アメリカ人不足を雇い週給七十二ドルを支給した(同地方の相場は週給十ドルないし二十ドルであった)。抑留所のバラック建設はアイダホ州南部にとつては福の神であった。

三、抑留所は横が一・六キロ、奥行きが四キロ、その中の四十四区画(ブロック)に五百余のバラックが立ち並んだ。そこには教会などが新築され、シアトル、ポートランド時代の生活が再現された。シアトル浸礼教会エモリー・アンドリュース牧師は家族および日系信者とともにここに移住した。

四、抑留所北端に長さ十一・二キロにわたりがんがい用水を引き、約四平方キロメートル(約百二十一万坪)の有望な農地を開墾、自給自足の道を開いた。

五、抑留所入りしてから数日おいて二千人もの日本人(主として独身者)がツイン・フォールズ周辺の農場に出稼ぎに出た。

六、同町の商店街は抑留所からバス便で来る日系人買い物客で潤った。

七、抑留所生活数カ月後、学生やホワイトカラーは中西部または東部へ転出した。

かつてほこりっぽい風が吹きすさんだミニドカ荒原は、今では北西部ではワシントン州ヤキマ(邦字新聞では焼馬と呼んだ)盆地などに勝るとも劣らない、豊かに肥えた農地となっている。



身売りもままならず

UPI通信社のその後

AP、ロイターとともに世界の三大通信社の一つと称されたUPI通信が、残念ながら経営が好転せず、縮小の一途をたどっている。一九〇七年に、スクリップス家が組合通信社のAPに対抗する純粹に商業的な通信社として設立したUPI（最初はUPで、一九五八年にINS通信と合併してUPIと改名）が、世界の三大通信社と呼ばれたのがそもそも「虚構」で、規模においても記事の充実ぶりにおいても、AP、ロイターと肩を並べたことは決してなかったのである。台所は常に火の車だった。

UPIの記者は事件の取材で、取材費も記者の人数も常にAPに対して五対一の劣勢にありながら、スクープでAPの鼻を明かすことを唯一の生きがいに、安い給与にもめげず、取材にあたったものだ。「武士は食わねど高楊枝」の心意気がUPIの記者のなれにもあった。安月給を承知でUPIの記者になったのだ。UPIのOBたちは親睦団体の「ダウンホール・クラブ」というのを持っているが、ダウンホールは節約の意味だ。ベトナム報道写真でピューリツァー賞を得た沢田教一カメラマンが戦場で危険を冒して死亡したこ

とも、UPIの記者魂のなせるわざであろう。もう一人の日本人UPIカメラマン、酒井淑夫もベトナム戦争でピューリツァー賞をもらっている。一九六八年十一月二十二日、ケネディ大統領が暗殺されたとき、後続のプレスプール車に乗っていたUPIのメリマン・スミス記者は、同乗していたAPの記者に電話を使わず、劇的な第一報を世界に発信して独壇場だった。

しかしこのころがUPIの最盛期だろう。スクリップス家が一九八二年に手放し、それから十年間に経営者が四人も交代するという不安定さで、一度は倒産した。二回目の倒産寸前の一九九二年にロンドンの中東放送センター(MBC)に売却される。MBCの親会社は、サウジアラビアの投資家シエイク・ワリド・ビン・イブラヒム氏らが経営するARAGグループ・インタナショナル(AGI)で、買収価格は三百九十五万ドルといわれた。しかしそれ以来黒字になるどころか、最近三年間だけで一億二千万ドルの損失を出した。このため経費を徹底的に切り詰め、支局も次々に減らした。一九九七年二月には欧州の取材活動をやめ、九月月後には欧州の拠点ロンドン支局まで閉鎖してしまっただ。スミス記者の華々しい時代には千五百人いた記者も、今では全世界でわずか二百二十五人。ロイターと違って電子情報分野に出遅れたことも、経営不振に輪をかけた。

親会社が経費節約は厳命しても、編集に一切口を出さなかったことは、UPIの元記者や現記者

も証言している。しかしMBCは一九九六年にUPIアラビック通信社を設立したことがある。英国のBBC放送がサウジアラビアの人権弾圧について報道したのがきっかけで、サウジアラビアにもそれに対抗する通信社が必要との判断で設立されたいきさつがある。

今UPIと契約している新聞はわずか三十。APの加盟社千五百五十社に比べても問題にならない。UPIは元来速報を得意とし(APに対抗するため)、ラジオ局の契約社が伝統的に多い。このためラジオ局のニーズに合った報道に特化するほか、インターネットなどを中心に活路を見いだしたいとしている。本社がワシントンにあるUPIは、ニューヨークなど主要支局を「バーチャル支局」にするなど窮余の策もとっている。要するに自宅を支局にするもので、記者が一人で自宅でテレビやインターネットを見ながら速報するのが仕事。二十四時間ラジオを念頭に深夜から早朝にかけて、他の通信社が弱い時間帯に配信する。つまりゲリラ戦法しか残っていないのだ。

といって身売りもままならない。買い手もたまたに名乗り出るのだが、身元の怪しい、うさんくさい人物ばかり。昨年は香港のインターネット関連の会社を買収工作に乗り出した。AGIは今まで投資した分を回収するのに必死だが、そんな額では買い手はつかない。この話も結局沙汰やみとなった。かつての栄光のUPIにとつて悲しい話ばかりだ。

(佐々木謙一「同盟クラブ会員」)

メディア談話室

新聞小説はどこへ行く？

権田 萬治

週刊文春の一月二十一日号の「運命激変」という特集に、「高樹のぶ子が書く超官能スレスレ小説 女性版『失楽園』 ついに登場」という記事が掲載された。

「朝つばらからクリトリスとは何ごとだ！」

最近、朝日新聞にはこんな抗議があるという。標的は芥川賞作家、高樹のぶ子氏の連載小説『百年の預言』。その過激な性描写で、『失楽園』以来久方ぶりに話題の新聞小説なのである」となかなかセンセーショナルな書き出しである。

もう露骨な性描写に驚く年齢でもないし、作者の言うように「私は濡れた花弁」なんていう、持つて回った言い方をするほうが、かえっていやらしい」とは、確かD・H・ローレンスも言っていたはずで、私も賛成なのだが、実はこの記事を読んで、がくぜんとしたのは、この八年間自宅に四つも新聞を取っているのに、新聞小説を一つも読んでいないことに気が付いたからである。

一時は娯楽の王座に

新聞小説はこれからどう読まれ、どんな方向に向かうのか？

何度読み返しても面白い高木健夫の名著『新聞

小説史』をひもとくまでもなく、新聞が近代文学の発展に大きな役割を果たしたことは、夏目漱石の小説の多くが新聞小説であったことを知るだけで十分である。が、その後、新聞の部数が急増、それとともに作家は多数の読者を意識せざるを得なくなり、菊池寛が『真珠夫人』を新聞小説で書き始めた大正九年（一九二〇年）ころを境に次第に通俗化していったというのが通説になっている。

戦中は新聞小説どころではなかったが、敗戦直後から昭和三十年（一九五五年）代の初めころまでは、新聞小説はエンターテインメントの王座を占めていた。新聞読者の約四割が新聞小説を読み、人気作家の評判作は新聞読者の八割が読んだとも伝えられる。

自分の経験でも、獅子文六の『自由学校』（朝日朝刊、昭和二十五年）や、石川達三の『四十八歳の抵抗』（読売朝刊、昭和三十一年）などは、毎日、新聞が来るのが待ち遠しいような気持ちで読んだ記憶がある。

しかし、テレビ時代に入った今日では、当然のことながら新聞小説の閲読率は低下している。数

年前のある調査だと、新聞読者のうち、男が四・九%、女が七・三%くらいという。新しいデータがあればぜひご教示願いたい、とにかく急激な落ち込みである。

新聞もさまざまな対応

その原因は、言うまでもなくテレビをはじめラジオ、週刊誌、雑誌などメディアの多様化であり、直接的には、NHKが始めた朝の連続テレビ小説の定着と、若者の文字離れにあると思う。そのことは、最近の文芸雑誌、特に純文学系の雑誌の恐ろしいほどの不振からもうかがえる。

もちろん新聞もこういう状況に対してただ手をこまねいていたわけではない。いろいろな試みをしてきた。

一つはジャンルの拡大。昭和二十年代の半ばごろから歴史・時代小説を数多く掲載するようになった。三十年代の半ばごろからは推理小説も掲載するようになった。これらは時代の流行の反映という側面ももちろんあるが、エンターテインメント的要素の重視ということであるだろう。

もう一つは、昭和五十一年に朝日が沢木耕太郎の『一瞬の夏』というノンフィクションを掲載、新聞小説という枠を破る試みをしたことで、サンケイが同五十九年から六十年にかけて夕刊で同じ作者の『深夜特急』を連載したのを見ると、読者の抵抗はあまりなかったものと思われる。

第三に、毎日の連載でなく、日曜版連載という試みもなされた。朝日が宮尾登美子の『クレオパ

トラ』をこういう形で連載したし、他の日曜版でも同じような試みがなされた。

坪内逍遙の説く作家の心得

とここで、先ごろ、本田康雄の『新聞小説の誕生』(平凡社)という研究書が出版された。

高木健夫の『新聞小説史』の空白部分を丹念に埋める試みで、新聞小説が新聞の雑報記事の続き物から、外国ものの翻案、政治小説などを経て一つのジャンルとして誕生するまでを追跡している。その詳細は同書に当たっていただくとして、そこに尾崎紅葉、幸田露伴らとともに読売に入社した、『小説神髓』で有名な坪内逍遙の新聞小説に関する考え方が示されているのでご紹介しておく。

逍遙は絵入り続き物とは異なつた独自の小説の必要性を強調し、読売の小説欄を指導した人である。

明治二十三年(一八九〇年)に発表した「新聞の小説」という文章で、逍遙は新聞小説を書く作家の心得を個条書きにしているが、その第一と、第五で次のように述べている。

「第一 小説にも当世の事情を報道するの意を含ませ、成るべく当世を本尊とし現在の人情、風俗又は傾きを示すべし」

「第五 所詮、娛しましむと同時に当世の有様を報道するか、然らざれば多少教え導く心ありたし」

「教え導く」という道德教育的な考え方はとも

かく、新聞小説がエンターテインメントの要素とともに新聞の報道機能と関連して考えられていることがよく分かる。

報道機能との関連が必要

新聞小説の可能性を考えると、やはり新聞の報道機能というものを意識することが特に重要だと私は思う。

それは、有吉佐和子の『複合汚染』、城山三郎の『毎日が日曜日』、渡辺淳一の『失楽園』、宮部みゆきの『理由』など、ベストセラーになつた新聞小説の内容を見ると、よく分かるように思う。

月刊誌や単行本と違って新聞は日々のニュースを伝える点ではテレビとほぼ同じように同時進行的なメディアである。従つて常に現代と接点を持ち、社会的な話題性を持つことが必要だと思う。

『複合汚染』は食品汚染の問題を取り上げて大きな反響を巻き起こした。現在その作品を読み直すと小説としては物足りない面もないわけではないが、さまざまなデータを盛り込んだこの連載小説は新聞だから可能で、テレビではできないものであった。

『毎日が日曜日』は、高度成長時代の企業戦士の群像を描いたものだが、バブル崩壊後も、定年後の人生を考える一つの材料として今も新鮮なものがある。

『失楽園』も、現代の男女の性意識の変化に対応した作品で、それだからこそ、多くにアピールしたのであって、単に性描写の問題ではない。

『理由』は、ミステリーだが、同じ作者の『火車』がクレジット破産を描いたように、住宅問題などをからめた社会性のある作品である。

新聞小説の閲読率が低下したといつても、日本の新聞の巨大部数を考えれば、何十万という読者のみだから、新聞小説の可能性は、まだまだ大いにあるといふべきだろう。

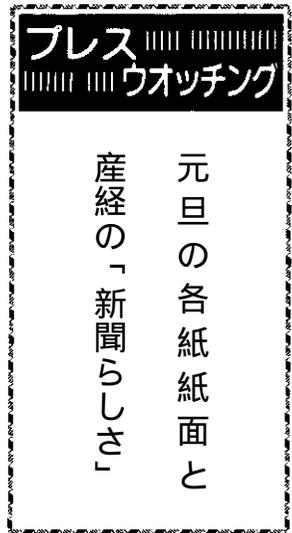
平成三年(一九九一年)には、筒井康隆の『朝のガスパール』が朝日に連載された。パソコン通信などで寄せられる読者の声なども同時進行的に取り入れる実験小説で、必ずしも成功したとはいえないにしても、新聞小説の可能性を広げる貴重な試みであつたことは否定できない。

今後模索続く

私は、もしかすると、これからの新聞小説は、新聞の機能を意識した社会性と大衆性のある作品と、そういう機能を意識しながら、前衛的で実験的な作品を書く試みとに大きく分極化する可能性もあると考える。そのために、連載の形態や長さ、本紙か日曜版かなど、さまざまな模索が続けられるように思う。

また、NHKが番組宣伝を民放以上に強化していることを思えば、新聞も優れた新聞小説のことはもっと宣伝してもいいようにも思う。連載中話題になつた新聞小説は、必ずベストセラーになるのだから、なるべく自社で出版するべきだし、その意味では出版局の強化も必要になるように思う。

(専修大学教授)



元日の各紙紙面と産経の「新聞らしさ」

「不安」を映した元旦紙面

今年はどうのようなる年になるだろうか。年頭恒例の「日本記者クラブ予想アンケート」(第二十七回・一九九九年版)の十問の多くは、次のように、あまりめでたくない設題だった。

99年度のわが国の実質成長率(12月政府発表の実質見込み)はプラスに(なる ならない) 大手銀行(都銀、長銀、信託)と外国銀行の合併が発表(される されない) 年内に発表される政府統計でわが国の完全失業率が5%以上になることが(ある ない)

北朝鮮がミサイルや人工衛星の発射実験を(行う 行わない)—— などなど。

明るい面への予想は、「『野村阪神』はプロ野球セ・リーグでAクラス入り(する しない)の一問だけだった。

昨年の元旦紙面は「漂流の時代」「混沌」といったフレーズであふれていた。今年はとくに共通語がない代わり、紙面全体が「不景気」「不安」のムードで覆われていた。各紙の共材は「ドルに

並ぶ巨大通貨圏『ユーロ』きょう誕生」で、これが内外で唯一の明るいニュースだったろうか。

衝撃度の弱いスクープ

最近の元旦の紙面では、あまり強烈なスクープにお目にかかれぬ。ことしも例外ではなく、そのうえ、時代を鮮明に投影した特集も見当たらなかった。一面トップを中心に各紙を見ると――

朝日

一面トップは「日銀を税務調査」のスクープ。

「豪華社宅や幹部名義の会員券 実質給与の可能性」という観点から東京国税局が十二月上旬に立ち入り調査に踏み切ったという。

日銀総理の殿様ぶりは、大蔵官僚と軌を一にしたエリート意識から出ているのだろうし、「単身赴任の支店長住宅の敷地が三千七百平方メートル、千四百万円の総裁肖像画」(第二社会面)などは秘密ではなかった。メディアはこれまで、日銀とその職員の社会的プレステージに見合うものとして許容してきたのではないだろうか。

朝日は二面の解説で「大蔵省の外局である国税庁側などに『日銀に対して、遠慮がまったくなかったといったらうそになる』と、ある税務関係者も話す」「中央銀行の独立性」などを盾として、これまで日銀は、第三者機関からの厳しいチェックを受けてこなかった」と、社会部・砂押博雄記者の署名入りでコメントしている。

このニュースはNHKも流したが、同じ事実でも、情報公開や時代意識の変化によって、新たに

ニュース性が付与されるといふ好例だろうか。

同紙の特集では、少子社会の中の「子宝ムラ」紹介(第三部)が目をついた。

読売

一面トップは「三和銀・横浜銀 全面提携へ」のスクープ。「店舗、口座、取引先を交換」「都内と神奈川 月内の合意目指す」という。都銀と地銀最大の提携とはいえ、合併とは衝撃度も随分違うだろう。

同紙は、社会面トップにも『写研』150億円所得隠し」の独自種を載せた。「地下金庫に札束85億円」「査察の国税ビックリ」とあって、このスクープの方が興味を引く。

特集では、第三部の「国内の世界遺産」と「危機にひんする世界遺産」、第五部の「森林作り」と「クリン・エネルギー」など、環境問題に焦点を絞っている。

連載が多い一面トップ

毎日

一面トップは、二十一世紀の日本社会を展望する連載「飛ベニツポン」の第一部「高齢社会はこわくない」。

準トップがニュースで、「日債銀 融資先の売れ残りマンション一〇〇〇室 ダミー会社で購入」という日債銀による不良債権隠しの一環。それなりのスクープだろう。

企画物では、第二特集「伝えよう世界遺産」の写真の美しさが出色だった。

日経

一面トップは、連載「21世紀勝者の条件」。新しい世界経済へのステップを探るまじめな企画だが、経済ニュースのスクープでなかったのがさびしい。準トップが「三菱商事が証券参入」だが、インパクトは小さい。

第二部は「デジタル新世紀」の記事、第六部は「科学技術広告特集」の広告記事だった。ともに科学技術革新ものだが、読み比べて、どちらが記事特集か広告特集か、その識別は難しい。

五面の連載「各界のリーダー、識者とのインタビュー」の初回で、速水日銀総裁が「景気、今年前半に底打つ」と語っている。これが同紙の一番明確なメッセージ、いわば「初夢」に映った。

東京

同紙の一面トップも連載もので、「21世紀を探す」。その第一回として、一九九八年ノーベル経済学賞受賞者、アマティア・セン氏とのインタビューを載せている。「市場自由化も貧困問題の解決には無力と映る」と語らせているが、二、三面の大半を割いたその内容は、市場経済万能の現にだけに、迫力に満ちている。

同紙は社会面のトップも連載。「明日をこの手で」と題して、二十一世紀の生活を展望している。第三部は「世紀を送る」として、二十世紀と十九世紀の世紀末を回顧している。特筆されるニュースは、社会面準トップの「朝鮮戦争 義勇兵に日本人多数志願 G H Q文書」だけ。それも歴

史的な事件で、ニュースとしては弱い。しかし、同紙は、正月紙面でなければ許されないような「現代史通覧」に徹したのだといえるだろうか。

産経

一面トップは「ユーロ」11カ国で始動」だが、客観的なニュース価値に従う紙面作りからすれば、これが正攻法といえるのだろうか。「防衛施設庁 天下り恒常的に298人 元年から9年」の告発記事を準トップに置いている。ニュースとしての新鮮さは薄いだが、「同庁と業界のもたれ合いの構図」に対する同紙の憤慨ぶりが、行間にはじみ出ている。

社会面トップもその関連記事で、「自衛官OBから」という投書をもとに、「OBの顔で業者選定?」「防衛施設庁発注の公共事業 半数が天下り先」など、内部情報を詳しく紹介している。

新聞らしい新聞

新聞の「アイデンティティ」、つまり自紙の独自性を、元旦の紙面で一番はつきりと表していたのは、産経新聞のように思える。

同紙の一面トップは、前述のように「ユーロ始動」だが、ここでは客観性を鉄則とする報道記事らしく、「各国が通貨発行という国家主権を放棄し世界有数の単一通貨圏を構成する試みは、近代国家の成立以来では例のない『歴史の実験』である」という一般通説を述べていた。もっとも厳密な客観報道の観点からすると、この記述すら記者の主観だとみなされるかもしれない。

それは別にして、この記事と対比して読むと面白いのは、その横に並んだ社説「年頭の主張」。一面の三分の一を占める大型の論説で、「緊張は国家意識を高める」という小見出しとともに、次のように述べている。

「一九九四年の朝鮮半島危機はカーター元米大統領の訪朝によって回避されたが、そこで一件落着とばかり日本の政治は弛緩し、社会党(当時)首班の自社さリベラル連立内閣が生まれた」

「逆に九八年の北朝鮮の弾道ミサイル危機は保守による自連立政権をまさに成立させようとしている。新年ながしかの燭光を感じた人のなかには、この政局動向に期待感を滲ませている人々も含まれているに違いない」

緊張緩和は政治を弛緩させて保革連立を生み、危機は国家意識を高めて保守連立を成立させる——という国家主義的発想には賛否がある。しかし、客観の記事と主観的論説はともに新聞の両輪だから、記事と主張が大きく乖離した同紙の紙面作りは、むしろ健全だと言えるだろう。

ところで、元旦各紙には、例年通り「天皇一家、つつがなく迎春」の記事と写真が掲載されている。しかし、「平成10年12月10日、皇居・御所(宮内庁撮影)」という日付を含めた撮影データも明記したのは、昨年同様、産経だけだ。

紙面の好みや論調への賛否は別にして、産経にいろいろな面で「新聞らしさ」が見られるのは興味深い。

(前澤 猛=東京経済大学教授)

放送時評

紅白視聴率が平成最高に Vチップ導入当面見送り

WOWOWのびっくり商魂

年末恒例のNHK「紅白歌合戦」が平成に入って最高の視聴率(ビデオリサーチ、関東地区)を出し、話題を供した。「下降線をたどっていた紅白人気の劇的復活」と書いたスポーツ紙もあった(一・三サンスポ)。

前半の第一部が四五・四%(前年四〇・二%)で後半は五七・二%(同五〇・七%)。大阪ではやや前年を下回ったものの、名古屋の後半は六〇%を超えている。BSテレビはカウントされないの、実際の視聴者はさらに多くなるはず。たわいのない歌番組には違いないが、「国民的行事」に定着したこの越年番組の健在ぶりを、まずは結構と言っておく。

人気の若い女性アナを司会に起用したり、歌手や演目を工夫したり、ショーアップの努力が奏功したには違いないが、やはり大不況のなせるわざ。年末年始休みの短かったことも手伝って、「レジャーよりテレビ」ということだろう。裏番組のTBS「レコード大賞」(午後六時十五分)同八

時五十分)も一八・五%と、この十年間で最高。これが終わって多くの歌謡ファンが紅白第二部に流れ込んだ形になっている。

注目されているのは紅白に続くNHK「ゆく年くる年」の二八・九%、この数字、日本テレビご自慢の「箱根駅伝」「電波少年」、フジテレビ「かくし芸」を下風に見て、紅白第二部、第一部、フジ・古畑任三郎vs.SMAP(三日夜)と並んで第四位なのだから驚いた。多くの人たちが紅白を見て「ゆく年」で除夜の鐘を聞く越年の茶の間風景。このパターンが多チャンネル時代にどう変わるかは興味深い。

しかし元日の深夜零時過ぎ、何気なくWOWOWにチャンネルを回してびっくり仰天した。ポルノ番組。新聞のテレビ欄は「レイト」と訳の分からぬ表示だったが、「ブレイボーイ・レイトナイト・スペシャル99」というのだそう、小一時間を小話形式でつなぎ、金髪美女の全裸をせつせと見せてくれる趣向。

とにかく、脱ぎまくり、体のあちこちを誇示しまくり、男とじやれまくり。モザイクはかけてあるが、それがずれていたり色が薄かったりで、肝心なところがかなりよく見えてしまう。CSテレビの「専門チャンネル」ならともかく、BSではよろしくない。正月三が日を通して、とんだお年玉。この時間帯ならまだ起きている子供もいるだろうし、受験生など勉強が手につかなかっただろう。

この局、十二月に加入二百五十万件を超え、「一九九九年は本格的飛躍を」と意気込む。その加速の手段なのかもしれないが、映画ばかりやっている局だからこういう発想になるのか。番組審議会などどう機能しているのか。ミソモクソも多チャンネル時代。そこでの悪しき商魂を見せつけるように、ぶせんとする。

公的規制は望ましくない

ここの二年、少年による殺傷事件の急増に伴いアメリカにならった「Vチップ」制導入問題は是非が大きな論議になっている。テレビの暴力番組、そこできなりしばしば市販のナイフが使われるシーンの影響が重視され、端的な「テレビ悪玉論」であり、立法府、行政府の規制マインドが誘発されたという状況である。

Vチップとは「暴力や性的シーンの多い番組が自動的にテレビに映らないようにする半導体装置」でテレビに内蔵される。局側はあらかじめそうしたシーンの多さによって番組を格付け、それを示す信号を付けて放送し、Vチップの作動にゆだねる。Vとはバイオレンスの頭文字とされるが、「ビューアー(視聴者)コントロール」の意味合いも無しとしない。現に、すでに実施に踏み切っているアメリカで、「ニュースも対象に」という意見まで出されているらしい。

こうした大勢下、郵政省は昨年五月に「青少年と放送に関する調査研究会」(座長、吉川弘之前東大学長)を設置した。テレビが青少年に与える

影響いかん、という観点からテレビの在り方を論議し、示唆・提言を求める趣旨。当然、従来から論じられてきた一般的な問題点が対象とされたわけ、Vチップ導入の可否はそこで目新しいものとして際立った。

十二月七日に出された報告書は、全体について「放送事業者の自主的対応が望ましい」として現時点での公的規制を排する姿勢を示し、まずは妥当。そして、Vチップ導入を見送り、青少年向け番組の充実、青少年に配慮した放送時間帯の設定や視聴適否の事前表示の必要を示唆、番組の分類基準や情報提供に関する業界の「ガイドライン」の策定、視聴者の意見・苦情に対する第三者機関の活用、調査研究への研究機関の貢献などを提言、これらの早期実現を図るため「専門者会合」設置を進言した。

この専門者会合は九人の構成員で一月六日スタート(座長、濱田純一・東大社会情報研究所所長)。六月まで月一回開催される。

Vチップ問題は継続検討、すなわち「当面見送り」となった。はつきり「ノー」ではないが、強硬論に押された気ぜわしい速断は避けられ、何よりだった。報告書の文言は概略こうである。

「Vチップについては、積極、慎重の両論があった。また諸外国においてもその有効性等の評価が分かれている。(Vチップには)放送事業者と視聴者の番組に対する評価の尺度が調和していることが要請されるが、現状ではこのような環境が

醸成されているとは言い難い。従って、今般の青少年対応策についての実施状況、デジタル技術の動向等を十分に踏まえ、引き続き検討を行うことが適当と考える」

とに「かく」見送り。「青少年と放送に関する専門者会合」もこれを段落とし、濱田座長は「導入の是非を改めて議論することはない」と言い切る(一・八東京)。となれば、これが行政側に「伝家の宝刀」としてゆだねられたことになる。油断は禁物である。

長野放送に芸術祭大賞

番組関連で話題をもう一つ。平成十年度(第五十三回)芸術祭賞テレビ、ラジオ部門の受賞作が十二月に決まり、一月十八日授賞式が行われた。応募数はテレビがドキュメンタリー三十六、ドラマ二十四の計六十本。ラジオはドキュメンタリー十五、ドラマ十三の計二十八本。なお、テレビ、ラジオから大賞一本ずつが選ばれている。

【テレビ】大賞⇒ドキュメンタリー、長野放送

「本当のことが知りたい——医療訴訟からの報告」
優秀賞(ドキュメンタリーの部)⇒NHK「原爆投下・10秒の衝撃」、山形放送「これにて、お別れいたします」でうれん祭文ただ一人」

放送個人賞(ドキュメンタリーの部)⇒石川テレビ赤井朱美「いのち輝いて」富樫小・金森学級の2年間」の企画・制作
優秀賞(ドラマの部)⇒中部日本放送「幽婚」、TBS「鳥鯉」、フジテレビ「大丈夫です、友よ」

放送個人賞(ドラマの部)⇒NHK若泉久朗(ひさあき)、「青い火花」の演出

【ラジオ】大賞⇒ドラマ、毎日放送「ハートオプゴールド」

優秀賞(ドキュメンタリーの部)⇒北日本放送「杯にひとひらの花—ある中途失明者と妻の記録」、東北放送「小野和子・民話のなかの女たち」
優秀賞(ドラマの部)⇒NHK「鳥が教えてくれた空」

放送個人賞⇒該当者なし

特記されているのは、長野放送がNHK、民放大局をしのいでこれだけの応募の中からテレビの大賞を獲得したこと。この局、地元の強力なライバルである信越放送に対抗、長年「追いつけ、追い越せ」と頑張った努力が結実した。医療過誤によつて亡くなつたり、植物人間となつたりしている不幸なケースを追い、現在の医事の問題点、奇妙な裁判の実情を描いて全国的なひろがりを持つた佳作である。

ドキュメンタリー番組がテレビジャーナリズムの原点であることを思えば、ローカル局がこつこつと素材を発掘し取材し、見事な作品に仕立てる精進は称揚に値する。多チャンネル時代においてもこの原点は揺るがないはず。対比して在京キー局のこの分野での不振は続く。系列局への東京発の娯楽提供という「宿命」は分かるが、番組コンテストのたびに心細さを実感する。

(大森幸男⇒放送評論家)



カザフ大統領選への疑惑

ロシア先頭に高まる批判

一九九九年、新年早々の一月十日、旧ソ連中央アジアの大国カザフスタンでソ連崩壊初の大統領選挙が行われ、現職のヌルスルタン・ナザルバエフ大統領が三選された。初の大統領選挙なのになぜ「三選」なのかといえは、一九九〇年三月、当時のソ連が大統領制に移行したのに伴い、カザフ共産党第一書記だったナザルバエフ氏がカザフ最高会議（ソ連式議会）の互選によって大統領に就任したのが翌四月。次いでロシア共和国にならつて有権者の直接投票により再選されたのが、ソ連崩壊直前の一九九一年十二月一日。今回が完全独立後、初めての大統領選になるからだ。

ところが、この祝福すべき「民主化」は当のカザフ各紙をはじめ世界のマスコミからの一斉批判を浴びた。今度の大統領選挙の一月十日実施が決まった昨年十一月、ウイーンに本部を置く国際新聞編集者協会（ＩＰＥ）はカザフ内のジャーナリストで組織されている「インター・ニュース・ネットワーク」の提訴に基づき、六十五カ国、法人、個人を含む四千の会員あてにナザルバエフ大統領あてにファクスを送る抗議行動を起こすよう呼び掛けている。これに応じて早速、カザフ政府批判

の論調を展開したのは西側ではニューヨーク・タイムズ紙をはじめとするマスコミだった。

「インター・ニュース」がＩＰＥに訴えを起こした直接の理由は昨年秋以来、カザフ政府の高官たちがカザフ内の放送局、新聞社、電話によるニュースサービス社を頻繁に訪れ、ナザルバエフ氏に對抗する大統領候補の主張を報道しないこと、ナザルバエフ氏の政策や家族に関する「暴露的報道」をしないよう露骨な報道規制を展開したことによる。もう一つの理由はそもそも今度の選挙自体が人権問題にかかわる、かなりいかがわしい仕組みの下で行われているからだ。

第一の問題点は、一九九一年十二月の大統領直接選挙制導入のとき、大統領の任期は五年、連続二期までと決められていたことだ。その通りだとナザルバエフ氏の任期は一九九六年十二月に終わるが、一九九四年四月、大統領の任期を七年に延長する国民投票が行われた。その結果、ナザルバエフ氏の任期は二期合わせて四年延び二〇〇〇年十二月までとなった。この修正は一九九五年八月の国民投票で承認された新憲法に盛り込まれた。

第二の問題点はなぜ二年近くの任期を残したまま新年早々、大統領選挙が行われたかだ。カザフの各政党はなお揺らん期にある。それにもかかわらず、二〇〇〇年末の大統領選という目標が定まったことにより政党の形成が進もうとしていた。ナザルバエフ氏は先手を打って大統領選挙を繰り上げたのである。他方、今回の選挙には、改革派

の経済通で知られるカジェグリン前首相（一九九七年十月辞任）や民主化を唱える野党「母国」のアシユルベク党首らが出馬表明をしていた。

しかし中央選挙管理委員会は、有力対抗馬とされていたカジェグリン氏については首相在任中の土地取得が刑事捜査の対象となつていないことを理由に、アシユルベク氏については無届け集会を行い三日間拘留されたことがあるとの理由で、大統領選への立候補届けを受理しなかった。これが社会的問題になると、ナザルバエフ氏は最高裁に中央選挙の決定が有効かどうかの確認を求め、最高裁は有効と裁定した。こうした念入りの操作の結果が八二％の高得票率を得た三選だった。

カザフ大統領選に対する批判を各国別に見ると、もっとも激しい批判を加えているのはロシアである。元ロシア大統領評議会委員のサタロフ、政治学者プーニン両氏はカザフ大統領選を批判する共同声明を発表。ロシア議会では民主派を中心にナザルバエフ批判が巻き起こり、政治紙「オブシエチャヤ・ガゼータ」は政治評論家キセリヨフ、イゾベスコワ両氏がモスクワ駐在のカザフ大使を厳しく追及する長文のインタビューを掲載した。これらの批判に対するナザルバエフ氏の答えは「ロシアはベラルーシを統合しようとしているが、カザフスタンは統合には参加しない」と反ロシア主義丸出しだった（記者会見）。三選の副産物は、カザフとロシアその他との国際関係の悪化だったとも言える。

（高橋 実＝評論家）

独で大衆街頭新聞大幅退潮

話題性などTVにお株奪わる

ドイツには現在、四百三紙の日刊新聞がある。

このうち十紙ほどが、街頭で一部ずつ売られる大衆新聞だが、これらの新聞は過去十年余りの間に発行部数の約一五%、百万部以上を失うという退潮を続けてきた。これは、一九九〇年の東西統一によりドイツの人口が千七百万人増加し、日刊、日曜、週刊を含む全新聞の発行部数が一九%増大している状況のなかでの現象である。

これらの街頭新聞は一九八五年には合計六百五十四万部を保持していた。しかし八七年には六百二十四万部、八九年には五百八十四万部と減少を続ける。そこに東西ドイツ統一により国土が拡大した結果、九一年の部数は一気に六百六十一万部に増大する。だが九三年には五百九十八万部と、再び六百万部を割ってしまう。そして九七年現在の部数は五百九十四万部。この数字は旧東ドイツ地域で販売されている分を差し引くと、十年余り前と比べて約二百万部の減少になる。

これらの街頭新聞のなかで群を抜くシェアを持つのが、全独十三都市で発行されているシュプリンガー・コンツェルン傘下の『ビルト』で、九七年の部数は四百五十三万部、街頭新聞全部数の実

に七六%を占める。このビルトにしても、ピークであった八四年の五百二十万部から七十万部近く後退した。現在の部数には旧東ドイツ地域で配布されている七十七万部が含まれているから、東ドイツの合併がなかったならば、百五十万部近くの減少という動定になる。

一八七七年創刊のドイツ最古の街頭新聞で、現在はシュプリンガー傘下にあるベルリン発行の『BZ』は、一九八五年には三十万七千部、九一年には三十三万五千部に達したが、九七年には一三%減少して二十九万二千部に落ち込んだ。

グルナー・ヤール・グループは三紙の街頭新聞を支配する。そのうち『ハンブルガー・モルゲンポスト』はかつて社会民主党所有下の九一年に十九万一千部のピークに達したが、現在は十四万三千部に低落している。ドレスデンの『ドンスナイ・モルゲンポスト』は九三年に創刊された当時の十四万六千部から、十二万一千部に低迷している。旧東ドイツ時代に『BZアム・ア・ベント』の名で唯一の街頭新聞であった『ベルリナー・クーリア』は、統一前の八九年に二十万五千部のレベルにあり、九七年にも十八万五千部を保持している。しかし、その大部分はベルリンの東地区に配布されている。

ミュンヘンでは二つの街頭新聞が発行されている。その一つ『アーベントツァイトウング』は八八年以来、二十一万五千部から二五%減少して十六万三千八百部に下落した。もう一つの『tz』

も八四年の十八万二千五百部から九七年には十五万三千部にまで減少した。

デュモン・シャウベルク社の『エクस्प्रेस』二紙は、ケルン版が八五年の三十万七千部から二十四万五千部に、デュッセルドルフ版が十三万部から八万八千部に下降した。ニュルンベルクの『アーベントツァイトウング/8ウーアフラット』は四十六万部から二十四万部に半減した。

このように街頭新聞が減少した原因は、第一にテレビ番組の変化だといえる。民営化元年といわれた八四年以後、民間、公共を問わず、テレビがバラエティー、トークショーなどで、センセーショナルな話題を扱うようになり、街頭新聞のお株を奪う結果となった。第二に定期購読の新聞も、街頭新聞と同じ大衆的な情報を提供するようになってきた。高級紙と目される新聞でさえ、従来はタブーであったような問題を扱うようになった。

街頭新聞の側も、こうした低迷状態から脱却するための工夫と努力を試みてきた。ミュンヘンの『アーベントツァイトウング』は第三の道を選んだ。それは、街頭地域新聞の道である。ツィンマー編集長は「従来の街頭新聞はそもそもだれも求めていない新聞だった。センセーショナルリズムはもう死んだ。これからは、まじめな、明確な、簡潔な報道で、地域の第二のメディアになる必要がある」と語る。しかしその効果はまだ表れていないという。どこに打開の道があるのだろうか。

(広瀬英彦 東京大学教授)





放送の「偏向」めぐり論議

台湾トリプル選挙で話題に

昨年十二月五日に行われた台湾の「トリプル選挙」に関して、前号では、陳水扁台北市長（当時）陣営による聯合報不買運動を取り上げたが、今回は放送の問題を、雑誌『新新聞』六一三A号の記事から抜き出して紹介する。

投票を間近に控えた十二月二日、こんな「事件」があった。

地上波テレビ・民間電視台（民視）の連続ドラマ「春天後母心」の出演者全員が嘉義市を訪れ、立法院議員選挙に立候補（当選）した民視代表取締役（董事長）蔡同榮氏のキャンペーンに参加した。

ニュースの扱いが議論的になるのが常だったが、こうした形で放送の「偏向」が話題になるのはおそらく初めてだ。

「蔡同榮氏が落選したら、『春天後母心』はもう見られませよ！」——有名俳優が演説会場に詰めかけた支持者ら三万人を前に声を張り上げる。同日午後、彼らは全員で嘉義市内を三時間にわたってデモ行進した。

董事長助勢のためにテレビ局関係者が応援に立ったのはこの日だけではない。十一月二十二日に

は別のドラマの出演者が、同二十七日にはこれから放送予定のドラマの出演者が嘉義市を訪れた。蔡同榮氏のこうした行動は当然、敵対陣営からの攻撃を受けた。しかし蔡同榮陣営の黄永煌・競選総幹事（選対本部長）は、「友人が友人のため

に助勢しただけ」と全く意に介する様子がない。ところで、出演者らはこうした助勢で報酬を得たのか。実は陣営幹部の発言がまちまちではっきりしない。陣営の李英武・サービス部主任は、

基本的に一人一万台湾ドル（約三万五千円）、歌を歌ったりした者にはその十倍以上を支払ったと言っている。一方で黄永煌氏は「出演者らは撮影の合間を縫ってボランティアで来てくれたもので、一銭も支払っていない」と強調している。蔡同榮氏選挙戦のニュースの扱いについては議論になっていないが、台北市長選をめぐっては国民党、民進党ともに全く正反対の評価を下している。

国民党・馬英九氏陣営の広報責任者は、民視のニュースについて、「民進党・陳水扁氏の」全くの誇大広告だ。陳氏が出るシーンばかり長く撮って、馬氏はほんの少しだけ」とこき下ろす。これについて民視新聞部責任者の胡元輝氏は、

確かに陳陣営を撮る時間が長かったことを認めたものの、その理由として「在野の声を拾うのは（国民党系の電波独占を打破するという）民視開局の趣旨にのっとったもの。両陣営のキャンペーン手法上、絵になりやすいイベントを多くした陳

陣営のものが長くなった。陳陣営のイベントの多くは、そのハイライトシーンがちょうどニュース番組の時間に重なるようセットされていた——を挙げた。

一方で民進党支持者の中には、民視の報道ぶりが「中立的に過ぎる」、あるいは「国民党に同情的過ぎる」という不満を持つ者も少なくなかったようだ。

例えば、陳水扁陣営の選対本部長で民視顧問でもある李鴻禧氏がその一人。彼は李登輝総統が派手な衣装で登場して注目された「強棒之夜」というイベントの現場中継が長過ぎる——と民視に抗議した。

一線の記者が「攻撃」されるケースもあった。馬陣営を担当した民視の林芥佑記者は、ニュースで馬氏が陳氏をどのように批判したかをレポートしたところ、「馬氏を助け、陳氏をおとしめた」と視聴者から批判された。馬氏の市政に対する政見をレポートすると、それも「馬氏の宣伝のお先棒を担いでいる」と批判された。脅迫の手紙まで舞い込んだという。「いったいどうしろというのか」——林記者は憤まんやる方ない様子だ。

民視に関する論議ばかりが目立つたようにも思えるが、他の地上波三局の「偏向」も、まるでなくなつたわけではなさそうだ。『新新聞』は、中視（中国テレビ）の報道番組の国民党系候補と民進党系候補の扱いの差についても言及している。

（木原正博「新聞協会編集部」）

川端康成さんの手紙

吉野 元

(共同通信社社友)

1

昭和十年五月に、川端さんの『伊豆の踊子』を読んで、自分もこういう小説を書いてみたいと思つたのが川端文学に触れた最初といえるかもしれぬ。若い縁におうような青春を片手にかざし、もう片っぱの手で文学をつかまえようとしていた私には、『伊豆の踊子』はまばゆいばかりの青春小説だった。

それから『抒情歌』や『浅草紅団』や『禽獣』などを読んで、次第に川端文学に感^{わく}溺^めしていった。

といつても、初めから川端文学の芸術的創造の「手」が読めていた、ということではない。小説が見えてくるのは、知的蓄積による内的成熟の結果によるものだ。昭和十五年に文芸評論家の河上徹太郎さんとお近付きになり、文学の話をつかうようになってから、少しずつ川端文学に親しんでいった。

2

昭和十六年のお正月に、河上さんのところへ一年始に行ったとき、

「河上さんは、川端康成と横光利一の小説はど

ちらがお好きですか」と私がたずねると、「どちらも好きだが……」と河上さんは微笑しながら、「昭和九年から書きだした『雪国』によって、正直いつて川端を見直したよ」

河上さんにそう言われて

国境の長いトンネルを抜けると、雪国であつた。夜の底が白くなつた。信号所に汽車が止まつた。

の有名な書き出しの『雪国』を私も読んでみた。その他、『正月三ヶ日』や『夏の靴』『愛する人達』などの短編小説を読みあさりながら、次第に川端文学に眩暈^{めまい}、陶醉していった。

3

敗戦後二、三年たつて、太宰治、坂口安吾、織田作之助らの華やかな文学活動を横目に見ながら、私もようやく小説を書くようになり、河上さんに読んでご批評していただいた。

また一方では川端さんの戦後の『散りぬるを』『ゆくひと』『住吉』などの短編小説を読んで、小説の形式と規矩を学んだ。さらに『山の音』や『千羽鶴』というひとときわ鮮やかな名作を読んでいつかああいう長編小説を書いてみたい、という熱い創作欲が胸底から突き上げてきた。そうはいつても、長編ともなるとそう簡単には組み立てられない。

昭和三十年代の終わりごろになると、少しずつ

長編小説の試作が書けるようになった。

4

試作といつても、四百枚前後の小説を書くには、休日^{ひかり}に二枚、三枚と書きためていくのだから、脱稿までに二年もかかった。

そして、思い切つて昭和四十一年の十一月に、川端さんにその長編小説を読んでいただくことにした。「果たして川端さんのような大家が、非礼を顧みずいきなり送りつけてきたおれの小説を読んでくれるだろうか」という不安が頭の隅をよぎつたが、意外にも川端さんは気軽に私の小説を読んで、次のような批評の手紙を下さつた。

拝復、御作「ガラス」を先日拝読し終りました。達筆です。少し達筆、調子が過ぎ、通俗に傾いたところもあります。(初めの方がよしいやうです)。着想は大変すぐれてゐます。意味も汲めます。この着想は是非生かしていただくために、この作品は書き直してもらひたく存じます。全体の三分の一ぐらいの枚数にひきまめられると私は思ひます。大変おもしろい題材ですから、このままでは惜しいと考へまして。

十一月十七日 川端康成

川端さんからこのような温かいまなざしの感じられるご批評を賜り、「ありがとございまして」と、思わずその手紙に向かつて深く頭を下げた。

調査会だより



新聞通信調査会・同盟育成会・同盟クラブの三団体共催「同盟関係者の平成十一年新年互礼会」に「喜寿の祝い」は、一月十四日(木)正午から東京・内幸町の日本プレスセンタービル十階ホールで開いた。桑田琢磨同盟クラブ理事が司会、大畑忠義同盟育成会理事長の年頭のあいさつ、齋田一路共同通信社長の来賓代表あいさつの後、司会者から平成十年中に喜寿を迎えた同盟関係者十七氏にお祝いの毛布を贈った旨の報告があり、吉田基一氏が代表して謝辞を述べた。次いで橋本正

通信社が
選んだ

平成十年(一九九八年)十大ニュース

時事通信社

【国内】

和歌山市内でカレーにヒ素混入、4人死亡、63人中毒→元保険外交員逮捕
完全失業率過去最悪など、戦後最悪の不況続く
参院選で自民惨敗、橋本首相退陣、小淵内閣発足
金融ビッグバン始動、業界の提携・再編急進展
日本長期信用銀行、日本債権信用銀行が破たん、公的管理下に
長野冬季五輪開催、日本の金メダルは5個
大蔵省接待汚職発覚、蔵相、事務次官が辞任
金融システム安定化関連2法成立、銀行に公的資金サッカのW杯フランス大会開催、初「金投入
出場の日本は3戦全敗
小淵首相(自民党総裁)と小沢自由党党首が「自
自連立政権樹立」で合意

【海外】

インドとパキスタンが地下核実験
クリントン米大統領、不倫疑惑で「不適切な関係」
認める→米下院が弾劾決議可決 『に幕
インドネシアでスハルト体制崩壊、32年間の独裁
米英軍がイラクを大規模攻撃 『可能性
北朝鮮がミサイル実験、弾頭部は三陸沖に着弾の
金大韓大統領が就任
アフリカで米大使館同時爆弾テロ、220人以上死亡
北アイルランド和平合意 『号
米大リーグ本塁打記録更新、マグワイア選手が70
ユーロ参加11カ国決定

共同通信社

【国内】

戦後最悪の不況、過去最大の景気対策
和歌山の毒物カレー事件で林真須美容疑者逮捕
参院選自民惨敗で橋本首相退陣、小淵政権誕生
長銀、日債銀が破たん、国有化。金融健全化に60
兆円

大蔵省、日銀で接待汚職。蔵相、日銀総裁辞任
長野冬季五輪開催、日本選手金メダルラッシュ
改正外為法が施行、日本版ビッグバンスタート
サッカーW杯フランス大会に日本初出場し、全敗
防衛庁背任・汚職事件。額賀長官が引責辞任
自自連立政権樹立で合意

【海外】

アジア経済危機が世界に波及、米市場に波乱
インドとパキスタンが核実験、日米欧が制裁
米大統領の不倫もみ消し疑惑で弾劾訴追可決
北朝鮮ミサイルが太平洋に落下、金正日氏が最高
指導者に
インドネシアで大暴動、スハルト大統領退陣
金融、自動車、石油と、世界企業の大規模合併進む
ロシア大統領に健康不安、政経両面の危機
大地震、大洪水など自然災害が各地で猛威
米大リーグで37年ぶりに本塁打新記録
ドイツ総選挙で社民党が勝利、16年ぶり政権交代



仲間

平成10年同盟クラブ忘年ビール会から

邦新聞通信調査会理事の発声で乾杯して祝宴に移つた。前ページ写真。参加者は百五十八人。

新喜寿同盟関係者氏名次の通り(誕生日順)。

石田進、柏木年一、先名正二、嶋村秀男、長沢喜一、長谷川久平、円谷文夫、宮寺益雄、湯田楨二、中川艶子、岩野昌弥、伊崎義清、渡辺陽行、服部国夫、山田邦之助、吉田基一、小野重信

【悲報】

池田 良作氏(元共同通信社政治部長) 肝臓が

んのため平成十年十二月二十一日死去。七十六

歳。喪主は長男卓夫氏。自宅は埼玉県入間郡大井町うれし野二一―一―一四。

山本 清造氏(元時事通信社庶務部長) 脳こうそくのため平成十年十二月三十一日死去。八十八歳。喪主は長男鼎(かなえ)氏。自宅は東京都豊島区高松二―四五一―一六。

同盟学寮生・古野奨学生を募集

同盟育成会は平成十一年度の同盟学寮入寮生と第三五回古野奨学生を募集する。

いづれも、本人または父兄がマスコミに関係する者を優先的に採用する。

【同盟学寮生】原則として平成十一年四月に大学・短大・専門学校・予備校等に入学予定または在学中の男子学生で、働きながら勉学する健康、志操堅固、人物優秀な者。寮所在地は東京都渋谷区桜丘町二九―三。JR/私鉄渋谷駅徒歩七分。寮費は月額一万八千円(二食付き)。申し込みは十一年三月十九日(金)まで。

【古野奨学生】大学・高校等に在学する志操堅固な学生で、奨学金の貸与が必要と認められる者。貸与金額、大学生二万四千円、高校生一万九千円。返済は卒業後一年据え置き、最長十年払い。無利子。マスコミ関係団体責任者または学校長の推薦状、保護者の源泉徴収票ほか必要書類を添え、申し込みは十一年四月一日(木)から同二十七日(火)まで。

新聞通信選書目録

- 一、国際報道と新聞 二、 円
R・W・デズモンド著 小糸忠吾訳
- 二、国際報道の危機(上) 各二、五 円
同 (下)
- 三、 J・リクスタット、M・H・アンダーソン共編 堀川敏雄訳・監修
- 四、アメリカの新聞倫理 二、 円
J・L・ハルテン著 橋本正邦訳
- 五、国際報道の裏表 二、五 円
J・フェンビー著 小糸忠吾、橋本正邦、堀川敏雄共訳
- 六、さらばフリート街 二、六二五円
——英新聞興亡の400年——
- 七、放送界この20年 各一、六二五円
放送史・月録1972〜93 (上)
同 (下)
- 八、 T・グレー著 各一、六二五円
江口浩、中川一郎共訳
大森幸男著

【問い合わせ・申し込み先】テ一五―一
東京都港区虎ノ門一―五―一六 晩翠ビル内 同
盟育成会(三―三三九三―一五五)

第三十五回時事均一句会

平成十年十二月十六日 銀座「BRB」

兼題 「炬燵」

天	炬燵寢は子宮の澱み泳ぐこと	和久
地	結論は微睡みのなか置炬燵	愚海
人	惑星に長らく住みて炬燵かな	あまり
人	雀見てこともなき日の炬燵かな	栄郎
人	切炬燵悪人虚子の句集読む	那由太
人	主人逝き冷えたる炬燵に尾がのぞき	相沢
人	目覚むれば酔生夢死や置炬燵	藤原
人	客訪ひて相好くす炬燵かな	磯
人	くれなるのシャガールの馬置炬燵	岡
人	倒産の叔父の寝顔や炬燵	杉浦
人	むずと摺む炬燵檜や火の香り	春楊
人	掘炬燵紫煙ゆるりと陽溜りへ	健次
人	炬燵寝の足喧嘩より疎くなる	森田
人	独り居の夜持て余す置炬燵	久美子
人	妻の実家やや寛がぬ炬燵かな	魚酔
人	あんぢようとまた頼みある置炬燵	正名
自由題		
天	庭下駄に妻のぬくもり寒椿	岡
天	短日や花売る女の耳飾り	健次
地	憑きものの落ちて三年日記買ふ	和久
人	中年やおるせば猛る牡丹鍋	あまり
人	めつむりて鬼となる子や冬の雲	那由太
人	妬心とは鴨躰より着水す	正名
人	終電の尾燈はるかに年くるる	杉浦

年のみがあらたまりゆく無情かな 森田
 冬ぬくし湾の真上の無人駅 魚酔
 人の世のあれこれありて冬銀河 愚海
 行き暮れて友の背丸く師走雨 藤原
 瀬音聴く五十路の肩に散り紅葉 相沢
 紅葉冷え朝より溢れ露天の湯 磯
 木枯や六文銭を握り締む 春楊
 満天の星崩れ落つ冬の海 久美子
 葬列の棒の如きもの年終わる 栄郎

虎ノ門句会
 平成十年十二月十七日 同盟クラブ

ひと肌の小春のぬくみ妻の墓 六郎
 根深葱咳込む様の父に似て " "
 干大根赤城風に耐えてをり " "
 湯豆腐の味しみじみと余生行く 義明
 短日や弔ひと通夜繋りぬ " "
 あの人は言訳ばかり時雨ある " "
 弧を描き鳶高みへと山眠る 博一
 くねくねと江戸の名残りを寒の坂 " "
 人気なき座敷に石榴の実たわわ " "
 晩菊やわれに縁なきクリスマス 多圭子
 菜園の大根届きし庭の先 " "
 憂き年や落葉の色を踏み分けず " "

訂正
 前月号一四ページの主見出し中、
 「謀報」を「謀報」と、同上段一五
 行目「謀報」を「謀報」とそれぞれ訂正。

目次 (二月号)

危機作り出すイラク・北朝鮮 山崎 真一 1

「ワナ」説と日系人の苦難 小糸 忠吾 4

川端康成さんの手紙 吉野 元 17

【メディア談話室】

新聞小説はどこへ行く? 権田 萬治 8

【プレスウオッチング】

産経の「新聞らしさ」 前澤 猛 10

【放送時評】

紅白視聴率が平成最高に 大森 幸男 12

【海外情報】

身売りもままならぬUPI 佐々木謙一 7

カザフ大統領選への疑惑 高橋 実 14

独で大衆街頭新聞大幅退潮 広瀬 英彦 15

放送の「偏向」めぐり論議 木原 正博 16

平成十年(一九九八年)十大ニュース 18

同盟学寮生・古野奨学生募集要領 19

新聞通信選書目録 19

俳句(時事均一句会・虎ノ門句会) 20

定価一五〇円 一年分一五〇〇円(送料とも)

発行所 財団法人 新聞通信調査会
 〒一五一 東京都港区虎ノ門一五一一六
 (晩翠ビル四階)

振替口座 (三)三五九三一 八一(代)
 一一一四一七三四六七番

印刷所 株式会社 太平印刷社
 ©新聞通信調査会1999